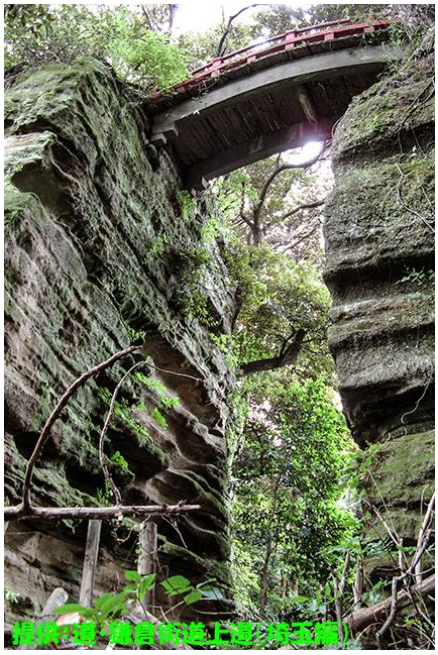
神奈川県

街道１

鎌倉七口は、わが国で最も古く、かつ、大規模な切通し群である。ただ、７ヶ所以上確認されている切通しが同時に造られたわけではない。年代順に４つ例をあげてみよう。①鎌倉が源氏ゆかりの地となった契機は、源頼義が義父の平直方から鎌倉・亀谷の館を 1030 年代に譲り受けてからであるが、頼義の玄孫にあたる源義朝が相模国での基盤を固める目的で亀谷殿に居を構えた際（1140 年代）、鎌倉北部の山ノ内と結ぶために開かれた道が亀ヶ谷坂（鎌倉市、国史跡）A と考えられている。②いわゆる七口ではないが、釈迦堂口洞門（鎌倉市）Ⓐ は、三浦半島に拠点のあった三浦氏の四代惣領・義宗（1126-64）が鎌倉の杉本に館を築き杉本氏と号した際、三浦とを結ぶ近道として造られた可能性が指摘されている。③『吾妻鏡』に開削について言及されていることで知られる朝夷奈切通（横浜市・鎌倉市、国史跡）Ⓐ は、鎌倉と六浦津（天然の良港）を結ぶため幕府の三代執権・北条泰時により仁治２（1241）に着工されたもので、鎌倉の外港を押さえることで北条氏の繁栄の礎となった。④仮粧坂（鎌倉市、国史跡）A は、『吾妻鏡』の建長３（1251）年 12 月３日の条に「気和飛坂山上」の記述があるが、鎌倉街道上道の出発点であることから、開削時期が鎌倉幕府の成立時期まで遡ったとしてもおかしくはない（その場合には、朝夷奈切通より古くなる）。左下の写真が釈迦堂口洞門、その下の写真が朝夷奈切通である。釈迦堂口洞門については、近世以前の人道用のトンネルの中で、最古かつ最大断面であることを指摘しておきたい。断面が大きいため明治期の開削との誤解もあるようだが、洞門そのものは中世由来、アクセス路の一部に近代の拡幅が見られるだけである。

街道２

鎌倉での重要な切通しではないが、全国に典型的な切通しがほとんど存在しないことから、大町釈迦堂口遺跡（鎌倉市、13 世紀以降?、国史跡）A についてもぜひ紹介しておきたい。右の写真がその切通しだが、これほど高く、垂直に、平行して切り上げた構造は類例がない。

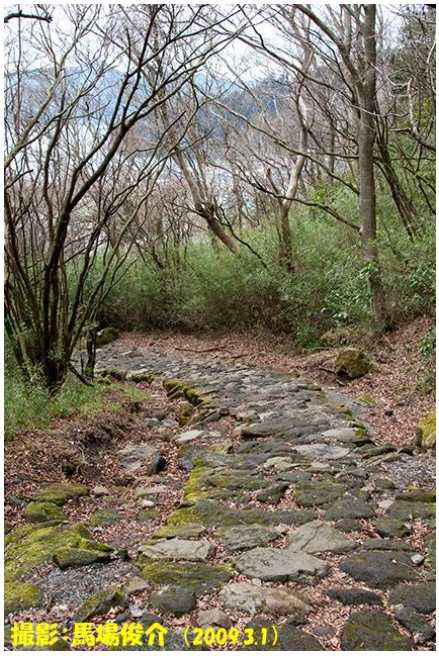


また、古さでは、前記・釈迦堂口洞門には譲ったが、全国に道路隧道がほとんどないことから、称名寺の洞門（横浜市金沢区、元亨３（1323）以前、市史跡）A についても言及したい。この洞門は釈迦堂口洞門と並び、国内に２ヶ所しかない中世の道路トンネルであり、称名寺と金沢文庫をつなぐ要道に位置している。元亨３（1323）に描かれた「称名寺絵図」からの年代推定だが、前記・朝夷奈切通によっ

て北条氏が金沢に居を構え称名寺と金沢文庫を創建したのが建治元（1275）頃なので、その頃に開削された可能性も十分にある。

街道３

箱根の東海道石畳（箱根町、文久２（1862）改修、国史跡）Ⓐ は、文久３（1863）、和宮内親王が第十四代将軍・徳川家茂に降嫁するにあたり、その前年に大改修されたものである（内親王は、結果的には中山道を通った）。ただ、石畳自体はもっと前から敷設されていたとされ、史料はないが、箱根西坂（静岡県側）が石畳化された延宝８（1680）と同時期だと考えられている。石畳延長は 2.66 キロ、完全に連続してはいないが、3.66 キロの史跡指定内にすべてが収まっており、わが国最長の街道石畳と言える。しかも、静岡県側の西坂（文化財的な視点での復元）と異なり、基本的に、文久２の改修時の状態がそのまま保たれている。



わが国を代表する箱根の石畳も、改修の直前と直後に通った西欧人の印象はどちらも否定的である。箱根を西から東へ越えたヒュースケンは、『ヒュースケン日本日記―1855-1861』の 1857 年 11 月 26 日の項で「箱根からの下りは、登り同様に困難である。大きな岩が路上いたるところにあって、けっして旅人に余裕を与えない。しかし、雨期の豪雨のさいにも路を保持して、通行できるようにしておくためには、岩を残しておくほかはない。雨は路を急流に変え、根深い岩だけを残して、他のものはいっさい押し流してしまうからである」と書いている。改修後に、箱根を東から登ったヒューブナーは、『オーストリア外交官の明治維新』の 1871 年８月 25 日の項で「東海道は…粗末な舗装で、馬は所々でほとんど通れなくなった…尾根を這いのぼってから、箱根の湖めざして下った」と書いている。マカダム舗装に慣れた彼らにとって、改修前後で印象があまり変っていないことが分かる。

街道４

箱根の東海道杉並木（箱根町、1640-60 頃、国史跡）A は、東海道では唯一の杉並木である。元和４（1618）に箱根越えの道が整備された後には松並木が植えられたが、芦ノ湖畔の霧の多い気象に合わないため杉に替えられたとされている。残っている杉は平成 26 の時点で 402 本。枯れた杉の樹齢から 1640-60 頃の植栽と推定されている。この見事な杉並木も、第二次大戦中、木造の軍用船を造るのための木材供出命令が県庁から届いた時、関係書類を焼却して従軍僧となった町役場の書記の勇気ある行動がなければ、消滅していたかもしれない。

街道５

茅ヶ崎市には他では見られない橋梁遺構が残って

いる。日本に多い木橋は、定期的に架け替えない限り必ず腐って消滅する。従って、現存する木橋は、屋根付き橋か、錦帯橋（山口）や住吉大社の反橋（大阪）のように定期的に架け替え続けた橋か、猿橋（山梨）のように再現された橋だけである。旧・相模川橋脚（建久 9（1198）、国史跡）A は現存する最古の木橋遺構であるが、大正 12 の関東大震災と翌年 1 月の余震により、水田の中から大きな杭が 7 本出現して存在が明らかになった。『吾妻鏡』に源頼朝が渡り初めをした等の記載があることから、頼朝の重臣稲毛重成が亡き妻の供養のために架けた橋と考えられたが、この推定は、現代の年輪年代測定により橋脚杭のヒノキ材が 1126～1260 年に伐採されたことが判明したことで裏付けられた。この平成 13 からの追加調査でさらに 3 本の橋脚杭が発見され、橋脚の配置から建造当初は長さ 40m以上、幅 8-9mの 5 径間(?)の木桁橋であったことが判明した。すべての木材を地中に保存した上で、その真上に同形のレプリカを置く大掛かりな復元展示が行われている。

街道 6

神奈川県にも関東平野部の特徴として道標が数多く建てられた。本リストには必ずしも悉皆的に道標が網羅されているわけではないが（データのない市・町の意識の変化に期待したい）、重要な 2 つの特徴は押さえられている。

神奈川県の『県立公文書館紀要 6』によれば、相模平野の中央に聳える大山への信仰は、8 世紀前半の阿夫利神社の創建、8 世紀後半の大山寺の開創と不動明王像の本堂への安置が端緒とされる。その後、平安・鎌倉・室町・戦国と浮沈がくり返されるが修験者が主体である構造に変化はなかった。しかし、秀吉の小田原征伐の際に北条側に組したことで、家康は修験勢力を一掃する。そして、下山を命じられた修験者たちが現在の秦野市・伊勢原市に大山門前町を形成した。『大山不動霊験記』の分析結果に基づけば、参詣者は神奈川県中心（53%）、身分は農民（48%）と町人・商人・職人（26%）、目的は病気平癒（36%）と災難除け（27%）、参詣の最盛期は 18 世紀後半（58%）であった。大山信仰の中心であった神奈川には、他県よりも古い建立年代の大山道標が目立つ。恐らく最古の建立と目される万治元（1661）の道標は天保 6（1835）に再建され現存しないが、万治元に建てられたという事実は残る。現存最古は、城南の不動明王像道標（藤沢市、延宝 4（1676））A である。大山道標の多くは塔身上に大山寺本尊の不動明王像の丸彫を載せているが、この道標もその定型にならっている（この像は、創建時のものではなく、後から載せられた可能性も指摘されている）。

神奈川県の道標のもう一つの特徴は、鍼医・杉山検校が藤沢宿から江の島へ続く約 4 キロの江の島道に建立し

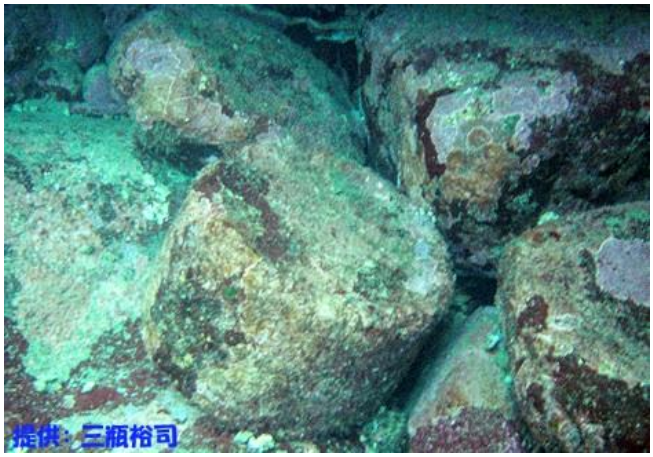
たと伝えられる江の島道標群（藤沢市、元禄 2（1689）頃）A が 12 基（他に、鎌倉市 1 基、世田谷区 1 基）現存していることである。17 世紀の道標が同一人物によって多数建立された例は、他に 1680 年代に真念が四国遍路道に建てた 37 基（現存数）のみである。前ページの写真は、ただ 1 基原位置にあると推定されている片瀬の江の島道標である。

舟運 1

和賀江嶋築港・跡（鎌倉市、貞永元（1232）、国史跡）A は、現存する日本最古の築港遺跡である。勧進僧・往阿弥陀仏が、三代執権・北条泰時に進言して実現に至ったもので、遠浅で風波が荒く、難破・破損する船が多かったため、防波堤の役割を果たしたものと考えられている。

舟運 2

象の鼻防波堤（横浜市中区、慶応 3（1867））A は、安政 5（1858）に横浜運上所北側海面に造られた 2 本の突堤のうちの東突堤が、慶応 2（1866）の大火後に逆 L 字型に伸延された時の伸延部である。明治 29 に東突堤の位置に大桟橋が造られたため、安政 5 の構造物はなくなり、逆 L 字突堤の先端部だけが残り、左に緩く曲がった構造から「象の鼻」と呼ばれるようになった。関東大地震で被災し直線に近い形に改造されたが、呼称は継続し、平成 21 の横浜開港 150 周年事業で当初の形状に戻された。

鉱業 1

小田原市を中心にしたエリアは、伊豆半島と並ぶ江戸城の石垣普請への石材供給基地であった。瀬戸内海の花崗岩の大坂城石丁場と違い、安山岩の江戸城石丁場は神奈川・静岡とも山中に散在する岩塊を集積する方式であったため丁場が広域に分散しているのが特徴で、様々な刻印のあることでも知られる。代表的なものは早川石丁場群・南側群の石丁場・跡（小田原市、慶長 9-寛永 13（1604-36））A と石橋海岸海底の石材群（小田原市、慶長 9-寛永 13（1604-36））A である。前者は、小田原地区で最大級の石丁場で成形された石垣用材が 100 点以上ストックされている。後者は、海中に残る石材群で、この付近に山から切り出した石垣用材を船で積み出した湊があったと推定されている（船に積み込む際に誤って海中へ落ちたと考えられるため）。